取材日：平成２５年８月９日（金）
取材先：NPO 法人　伊賀の伝丸（三重県伊賀市）
レポーター名：三重大学人文学部法律経済学科３年　松田玲子

◇◆

多文化の町伊賀で共に生きる
～外国人との共生を目指し心とこころを伝えてまわる「伊賀の伝丸」～

多文化の町

伊賀から連想する事柄とは何か。この問いに対して、多くの方は伊賀流忍者を思い浮かべ和の印象が強いのではないだろうか。筆者もその内の１人である。しかし実際には、伊賀市の学校ではクラスメートに２、３人の外国人がいるのが普通な多文化の町である。全国的に見ると三重県は外国人人口比率の３位（平成２３年末　法務省　在留外国人統計）で、県内には約１００カ国の人々が在住している。また県内で見ても、伊賀市と鈴鹿市は外国人人口比率が４～５％と高い。そこで、伊賀市にある「NPO 法人　伊賀の伝丸」（以下、伝丸）は、地域の日本人と外国人の共生を目指し翻訳・通訳を中心に活動している。

海外経験を通して

伊賀の伝丸代表の和田京子さんは、インドネシアのジャカルタで約３年間半過ごした経験がある。最初はインドネシア語が分からず、文化の違いにカルチャーショックを受け、海外で暮らす大変さを体験した。その後３ヶ月程経つと徐々に生活に慣れていき、インドネシア語で冗談が言えるまでになった。それは周りの助けや支えがあったからである。一方副代表の菊山順子さんは、青年海外協力隊として２年間パラグアイで過ごし、そこでスペイン語を話せるようになった。さらに、８ヶ月にわたって中南米を旅した経験もある。ふたりとも海外で一時期を過ごし、地元伊賀に戻ってきた際に同じことに気づいた。「伊賀には外国の方が多い」そして、「多岐にわたる問題がある」ことに。保険の問題、制度の不十分さ、労災事故など、同じ地域に住みながら外国人ゆえの不便さを感じながら暮らしていたのである。海外での生活で言語・文化の違いに戸惑いながらも、周りに助けられ支えられ充実した生活をおくった経験から、今度は自分たちが“多文化のまち・伊賀”で何かできないかと動き出したのである。

命と子ども達の未来を守る取り組み

「外国人支援ではなく共生が目的です。外国人の方からも力を貸してもらえるようになりたい」と、和田京子さんは強く熱い口調で話されていた。伝丸が目指すのは「言葉の壁をのりこえて、ともに住み良いまちづくり」をすることだからだ。共生とは、一方的に支援するのではなく、お互いが助け合うことだ。その為にはまず、異文化の地で過ごしやすくするお手伝いが必要だろう。日常のあらゆる場面に、言語と文化の壁が存在しているからである。数々の取り組みの中でも特に重みを感じたのが、教育現場と医療現場での通訳である。「子供を守りたい」「通訳は正確でないといけない」と、おふたりが話されていた想いが、この取り組みに詰まっているように感じた。

○医療現場での通訳

まず医療現場での取り組みについてである。病院で医師から患者への病状説明の場面での、通訳の必要性は高い。単なる病名の通訳だけでなくニュアンスを伝える大切さが存在していると、

菊山順子さんは話されていた。病気の時は不安で、医師の言葉は難しい。日本人の我々でも感じるとしたら、外国人にとってはより強くそう感じるだろう。医師からの長い説明の中で、結果としては大丈夫で心配もいらないと言っていたとしても、そのニュアンスが伝わらないと、自分は重病だと誤解が生じる可能性がある。あやふやな理解ではなく、医師の説明を正確に、そして日本人特有のニュアンスなどを誤解の生じないように通訳するのである。そのためには専門用語を知っている必要がある。そこで伝丸は、常に専門家と連携し、その都度対応することを繰り返し、今では10年分のノウハウの蓄積がある。しかしそれで安心することなく、さらなるノウハウの蓄積を続けている。なぜなら制度は変わるからである。行政書士、社労士、弁護士などの専門家と常に連絡を取り、情報を新しいものにしているため、過去にない相談内容にも、適切な対応ができるのである。

○教育現場での通訳

教育現場での取り組みとして、小中高の三者面談、説明会、進路相談などに同行し、先生の伝える内容をしっかりと親に通訳することも重要である。親に伝わっていない先生の言葉があるからだ。親よりも子どもの方が日本語を使える場合、子どもが通訳の役割を担うこともできるが、自分にとって都合の悪いことは伝えない可能性がある。伝えなかったことへの善悪ではなく、適切な伝達が行われることが重要なのである。なぜなら、特に進路相談の場合、適切な伝達による理解が親の教育への意識を上げ、結果として進学率が上がるからである。子どもの学ぶ機会を守り、さらに広げることは、子どもたちの未来を守る事にも繋がるだろう。

想いによって繋がる

支援は国、行政によっても多様な取り組みが行われている。しかし、進路相談や病状説明の通訳といった、より細かいニーズへの対応は地域密着したNPOだからこそ出来ることではないだろうか。無料で行っている相談には、困っている外国人だけでなく、どう接して伝えたらいいか悩む日本人も訪れる。相談は、今、地域全体が何を必要としているのか知るチャンスでもある。伝丸の存在が、共生のための橋渡しの役割を果たしているのである。

取材の最後で、「NPO法人　伊賀の伝丸」をやり続ける根源と想いについて聞くことができた。「困っている人が変化、成長していく姿を見ることで、人の人生を良い方向に変えたときの喜びの大きさ」、「人間の素晴らしさや力を常にもらっている」、「大変でもやめられない中毒」、「究極の自己満足」などの言葉で表現されていた。そして根源には、伊賀が大好きで、伊賀を好きな人を増やしたい、という伊賀の町づくりへの熱く、温かい想いが溢れていた。伝丸を続ける真の原動力とは、想いの強さなのだろう。

＜取材後記＞

事業説明の際、以前ラブレターを2回翻訳したことがあると余談を聞きました。「少し内容を盛って翻訳しといた。私の想いを入れてどうするの」と笑いながらも、相手に伝わるように翻訳をされた和田京子さんの気さくな人柄が、その場にいた私たちに伝わった瞬間でした。また菊山さんは、14カ国もの料理を提供している無国籍レストランを経営されており、地域の方に安くて美味しいと評判のようです。魅力的な場所には必ず魅力的な「人」がいると私は考えています。今回の取材を通してこの考えはさらに確固としたものになりました。和田京子さん、菊山順子さんは、温かくて強い想いを持ち前進を続ける魅力的な「人」だったからです。おふたりのような魅力を持った方が伝丸にいらっしゃるから、地域の日本人、外国人、さらには関係機関に信頼される存在なのだろうと感じました。